

『源氏物語』の教育学的考察

— やまとことばの心の学び —

An Educational Study of "The Tale of Genji"

尾 田 綾 子

by Ayako Oda

はじめに

『源氏物語』についての注釈書・評釈書の類は古く鎌倉時代から書残されているが、物語成立に関わる記録・解説書は残っていない。従って、御世四代・七十余年・登場人物四百余人を描き込んだ五十四帖にも及ぶこの膨大な物語が、本当のところ何の為に何を目標に書かれたのか未だに不明である。語られている内容から、平安王朝期の恋愛心理小説だと決めつけている人々も多いが、それにしても恋愛心情とあまり関係のない事まで多々詳細に語られているのはどういう訳であろう。勿論、この物語は人間の心理描写にすぐれ、筋の運びや場面の展開も非常に面白いので、読者はあの『更級日記』の少女のように、歴史的事件を追う思いで光源氏の運命に夢中になったり、或は、源氏の君の恋の相手として語り出された様々な女君の個性豊かな姿に興味を奪われて、その為に書かれた物語であると疑いもなく信じてしまうのも自然の成行きではある。

古典を合理的に緻密に考究した本居宣長でさえ「およそこの物語五十四帖は『物の哀れを知る』という一言に尽きぬべし」（紫文要領）という結論に至りながら、他方で光源氏の君の年立を綿密に作成したから、以来ますます読者の意識を一代記的な時間の流れの中に固定してしまったと考えられる。しかし、これでは長短不揃いの五十四帖に分冊されている事情が一層不可解になってしまう。

『源氏物語』はすぐれた古典である。恍惚として物語の世界に浸り時を忘れる思いをした普通の愛読者は、今日まで世にどれほど存在したであろうか。その外に注釈・読解・解説を試みた夥しい人数の研究者達。そして、物語の紹介、推薦の労を厭わず価値を守りぬいて来た人々。数限りないこうした物語享受者の歴史を通して『源氏物語』存在の意味や目標が浮かび上がって来ると考えることもできると思う。古く、藤原俊成の「源氏みざる歌よみは遺恨のことなり」（『六百番歌合』）から、

宣長の「歌よむべき心ばえを知らむとならば、此物語を、つねによく見べし、此物語に書たる事ども、人々のしわざ心ばえなど、ことごとく歌よむべき心ばえ也。」（『紫文要領』）に繋がる歌道の教科書としての享受の歴史。又、阿仏尼が『乳母の文』で「よくよく御覧じて、源氏をば、なんぎもくろくなどまで、こまかにさたすべき物にて候へば」と源氏物語を子女教育の参考資料として重要視していること。続いて、室町時代の女子の心得を箇条書きにした『身のかたみ』の中でも、源氏物語の登場人物を引用して具体的に戒めを説き、「源氏物語にもるゝ事は候はず候。この物語を御らんじても、女ぼうのしんたい、御たちるに御心がけ候べく候。」と女性の進退、立居振舞の規範として全面的に認め推薦していること。近世においては、熊沢蕃山が『女子訓』の中で「世の学者の源氏物語を淫乱不節の書といへるは、人情の正不正を知といふ詩の奥にもいたらざるか。中夏日本、古今人情同じければ、詩は人道の益たる事すくなくならず、源氏は、和国の風俗人情をいひ、古代の質素の風をあらはし、礼樂を得たる書也。」等々と、人情風俗の師範であるとし、明石上を感服すべき女人として紹介していること。これ等の先達に依る教養・教育書としての享受の歴史。^{註1}こうして多くの人々に読み伝えられる中から生まれた絵巻・調度品など美術工芸品の数々が、日本的美の典型として人々の美的センスを教導してきた歴史。以上一瞥しただけでも、『源氏物語』を単なる性愛の書と限定せず、むしろ教育書としての見地から考察してみる意味がありそうに思えてくる。

更に、原典に即して考えてみよう、物語論として有名な「蜚」の巻の「その人のうへとて、ありのまゝに言ひ出づることこそなけれ、よきも

あしきも、世に経る人の有様の、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へまほしきふしぶしを、心にとめがたくて、言ひおきはじめたるなり。よきさまに言ふとては、よきことの限り選り出でて、人に従はむとては、又悪しきさまの、珍しき事を取り集めたる、みな、かたがたにつけたる、この世のほかのことならずかし」に見られるように、物語はこの世の人間の姿を伝えながらも、個人的な誰それの事実ではなく、世に在る様々の事実の中から作者の心のフィルターを通して選り抜かれた真実を語る――語るに価するものを語るというのが光源氏の言であり、恐らく作者の主張でもあらう。物語の中のこの時の話相手は玉鬘の女君であるが、九州の田舎から上京して都の生活に慣れていないということもあって、物語を「ただいとまことのことこそ思うたまへられけれ」と思って読んでおり、「昔物語を見給ふにも、やうやう人の有様、世の中のあるやうを、見知り給へば」とあるように、物語を通して世の中の有様や人の心の有様を学んでいるのである。この女君はもう二十才も越えているのに、五月雨の蒸し暑さの中で長い髪の乱れるのも気づかない程せつせと物語の書写に明け暮れ励んでいらっしやる。源氏の邸の六条院では、同じように紫上も明石の御方も小さな明石の姫君の為とこと寄せて物語を楽しんでいらっしやる。源氏の君は、姫君にはこれは見せるな、これはよろしい、と教育的配慮を怠らない。『源氏物語』の書かれた平安時代には、既に、物語による人間教育があったと推測しもよいのではなからうか。

『源氏物語』の文中には、姫君を教育する――おほしたてる（生ほし立つ・立派に一人前にするの意）――という言葉・場面がしばしば現わ

れる。「うち語らひて、心のまゝにをしへ生ほし立てて見ばや」(若紫)と云って幼い紫上を攫うようにして自邸に連れて来てしまった若い源氏の君は、「今より教へ聞え給ふ」・「教へ聞えんかし」と機会ある毎に王朝貴族社会に必須の教養を姫君に教える役を喜んで引受ける。そしてこうした光源氏の心算では、二帖「帚木」の巻の「雨夜の品定め」のところで、一般論的に、終の頼み所とすることができそうな理想的な女性には身近に居そうもないから「ただ、ひたぶるに子めきて、やはらかならむ人を、とかくひきつくろひては、なか見ざらん。心もとなくとも、直し所ある心地すべし」と左馬頭が素直な女を理想的に教育して共に暮してみたいと願望を述べた、その筋書きの展開と理解することができるのである。なお、二十一帖「乙女」の巻では、長男夕霧の大学寮入学を物語りながら、権門勢家の子弟の教育論が堂々と論じられているし、続く二十二帖からの「玉鬘十帖」の巻々は、改めて王朝貴族社会に生きる女性にとって必要と思われる知識が、整理され十帖に按排されて多面的に語られているのである。『源氏物語』は教育・教養について深い関心を持った作者によって書かれているという感想を抱いた読者は今迄にも少なからず居たことと思う。

こうして、『源氏物語』は子女の教育と関係があるという思いは始めこそ漠然とした理想であったが、物語を読み続けてゆくにつれ、一条帝の中宮彰子の教育係りとして、その父親藤原道長から信頼されていたらしい女房藤原為時の女という作者像の輪郭とも重なり合って、次第に確信的な現実性を帯びて来た。『源氏物語』は『河海抄』に伝えられているような消閑の物語^{注3}ではなく、十一才で内裏に入内された高貴な姫君の

為に教科書として捧げられたものに違いない。たとえ、これを歴史的事実として証する方途が無いとしても、少なくとも『源氏物語』はひとり中宮彰子を幸福なすぐれた女性に育て上げる為に書かれたものと仮定して読み解くことは可能であろう。

教育的見地に立って、どのような内容と方法が籠められているか検証しながら再読してみると、物語の内容として語られた事件・場面の背後に、「人の心」を育てる為の構造的な計画的配慮が驚くほどの確に緻密になされていることが歴然と顕れてきた。気がついてみると、巻々にはそれなりの伝え教えたい目標があつて、それが語り聞かせる声ならぬ文体の差違となつて効果的に述べられている。一巻ずつの分量の違いや巻々の重ね方の順序にも思わぬ絶妙な考慮がはらわれていて、この物語を読むという体験を経るうちに、自ら知情意にわたって心が触発され、力を得、広く深く美しく磨かれてゆくような思いがするのである。

それにしても、改めて教育という営みについて反省してみると、教育の目標は、生ふし立てること、一人前にすること、即ち、この世に生命を与えられた子供が、爾来、各々の属する社会の文化の中で、自由に伸びやかに、より善きものを求め実現しながら生活し得るように準備するのを、先達として手を借す働きであろう。①生きる技術として基礎的な型を身につけさせること、②生きてゆく空間の様相を具体的に知らせること、そして、今日では「人格の完成」という語で表現されているが、一番大切なこととして、③自ら生きようとする心を育てることであろう。だがこの教育的実践は容易ではない。教育者は、一方で、被教育者の自ら受け止め判断し行為する主体、自由に生を実現しようとしている主体、

この主体の在り方を受け止め支え力づけながらも、他方、その社会の文化が善しとする価値規準を、教育を受ける者が主体的に自らの力で選び採り得るように導き方向づけるという、個性伸長と普遍性獲得とを同時に計る困難な営みである。古来、教育は教育する立場にある者と教育を受ける側の者との間に深い愛情と真摯な信頼という直接的な緊密な結び合いがあつて始めて機能すると言われてきたが、これは洵に当を得た真理である。『源氏物語』が千年後の今日なお読者に深い感銘を与える不思議な力を秘めているのは、幼い彰子様に対して深い労わりと愛情を抱き心から育み導こうと願った精神があつたからだと思いたい。紫式部は『源氏物語』という教科書を書き上げること、王朝文化の最高の位に立つ中宮彰子様が宮廷生活のすべてとそこに生きる人々の心の姿・働きの隅々まで意識し理解できるよう計ったのに相違ない。しかも、前述の「真の教育」の性質上、これは不特定多数の人々に対して書かれたものではなく、ひとり「中宮になられる彰子様」という個人の為に計画された教育内容を有つと考える必要がある。それがこのすぐれた物語の限界でもあると考えられるからである。

さて、『源氏物語』の巻々はすべて教育学的に検討され得るが、この小論では「子供に言葉を教える」という見地から十帖「賢木」の巻を中心に考察を試みたい。

一、「言語」についての省察

本居宣長は『源氏物語』を一言で「もののあはれ」と総括したが、もののあはれという語はどのような意味を擔っているのだろうか。この場合の「もの」は「対象の性質や状態が、はっきりとは言えないが、ともかく意識の対象となる存在」(岩波古語辞典)の意であらうし、「あはれ」は「感動詞」とハレとの複合。はじめは、事柄を傍から見ても讚嘆・喜びの気持を表わす際に発する声。それが相手や事態に対する自分の愛情・愛惜の気持を表わすようになり、平安時代以後は、多く悲しみやしみじみした情感あるいは仏の慈悲を表わす(同上)であるから、「もののあはれ」は「ものにふれて発動するしみじみした気持」といったらよいであろうか。しかし、この説明では「いかほどめでたき花を見てもめでたき花と思はぬは、物の心知らぬなり、さやうの人ぞ、ましてめでたき花かなと感ずることはなきなり。これ物の哀れ知らぬなり」(紫文要領)と言われているような、あはれの気持を持たない者に、どうやってわからせることができるであろうか。続いて宣長は言う。「ただ人情のありのままを書き記して、見る人に人の情はかくのごときものぞといふことを知らするなり。これ、物の哀れを知らするなり」・「物語は物の哀れを書き記して、読む人に物の哀れを知らするといふものなり」と。物語の具体的な人情を書き記しているところを指して、これがあはれと心打つ人情なのだ知らせる以外に方法はないと言うのである。

この宣長の言う「もののあはれ」は人情一般を指しているが、枕草子の書き出しの「春はあけぼの……」によると、同じ自然の情趣を感得

するのに△をかし▽と△あはれなり▽は区別されて使用されている。

「秋は、夕暮、夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の、寝どころへ行くとして、三つ四つ二つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた、言ふべきにあらず。」

このように清少納言の鋭敏な心は、秋の夕暮れに同じ空を飛んでも、鳥と雁の情趣は違うと感じている。一方は、胸がじんとするというような同感の情であろうか、他方は、絵に美しく書きたいような秋らしい風情だとも言いたいのであろう。△あはれ▽・△をかし▽とそれぞれ異なる言語で表現された微妙なニュアンスを察知できないような鈍感さでは、優雅繊細に洗練された宮廷生活には入ってゆけない。

自ら△あはれ▽と思い、人にも語り、歌にも詠むことができる為には、心の深いところで△あはれなり▽と感じる経験を重ねていなくてはならないし、又、胸の奥の前言語状態のもやもやした思いを△あはれ▽或は△をかし▽という社会的な用語で把握してみなければならぬ。更に考えれば、個人の心は寧ろ普遍的な言語によって然かと思識され、確かな内実のある存在となるのではあるまいか。言葉は生きている人の心と結び合っではじめて生命感に満ちた力を発揮する。言語と人間の心、論理と倫理は同根のものなのであろう。

『源氏物語』の中で△あはれ▽の心を学ぶために△あはれなり▽と語っている表現に注目しているうちに、巻によって意識的と思えるほどの用語の偏りに気がついた。五十四帖の中で△あはれ▽の使用度が頻繁なのは十帖の「賢木」の巻である。文庫本にして四十八頁分の文章の中に四

十二回も使用している。ちなみに、八帖の「花の宴」の巻は、わずかに十頁の分量であるが△あはれ▽は一語も見当らず、△をかし▽・△おもしろし▽が十五回使用されている。「左の大臣、うらめしさも忘れて、涙おとし給ふ」・「博士どもの心にも、いみじう思へり」・「いとほしうもあるべいかな」・「いと物嘆かしう、眺め給ふ」等と△あはれ▽という用語で表現できそうな箇所でも全く使っていないのである。九帖の「葵」の巻は、「賢木」と同じ四十八頁にわたる文章であるが、のっけから△物憂し▽と書かれ、この用語は巻中二十八回も使用され、更に△うし▽と同意語の△うたて▽・△いとほし▽・△心づきなし▽・△心苦し▽・△うとまし▽・△つらし▽・△厭はし▽・△いぶせし▽・△憎し▽・△思ひ屈んず▽等、拒否感情を表わす用語は、無慮百回以上に及び枚挙にいとまがない。なお、この巻での△あはれ▽の頻出度は二十回であるが、「あはれに、かたじけなし」という具合に、下に続く「かたじけなし」という語を修飾する「しみじみと」という意味の副詞的用法と、他では「気の毒だ」の意に解される用法が多い。

次に、巻々に於ける、用語の偏りと物語られている内容・筋との関係を考察する必要があるが、その前に、もう少し詳しく△あはれ▽の語意を問題にしなから「賢木」の巻の使用法を考えてみたい。というのは前述した様に△あはれなり▽という語は「しみじみした気持」であるから、「何を」或は「どんな気持で」しみじみ味っているのか具体的な内容は不確かである。従って、日本人である我々にとっては、△あはれなり▽は懐しい響きを持った言葉であり、それがどういう意味で使われているかとあまり詮索せずに、人情と呼ばれる優しい情感が深々と心に甦

るのを気持よく感じる思いをしているのである。『源氏物語』は、今日諸外国で翻訳され、世界の古典として愛読されているが、 \blacktriangle あはれ \blacktriangledown という語はどのような言葉で訳されているのであろう。単語として \blacktriangle あはれ \blacktriangledown に代置できる用語が諸外国の語彙の中に存在するものであろうか。ふと気がついて、手許のアーサー・ウェリーの英訳、サイデンステッカー氏の現代米語訳を繙いて見ると、両者共、その辺りは全く意識してしまっている。翻訳ではどうしても話の筋を文章の流れと共に伝えることが主眼となるのであろうが、 \blacktriangle あはれなり \blacktriangledown は、成程、日本人の心の中で育った語彙であり、諸外国の人々の心の中には意識されぬ思いなのであろう。従って、イコールで結ばれるような言語が存在していないから、それぞれの文脈の中で適わしい用語を見付けなくてはならなくなる。サイデンステッカー氏の随筆に、自国語に翻訳するに当って、與謝野晶子・谷崎潤一郎・山岸徳平・玉上琢彌の現代語訳を使ったとあり、これ等の現代日本語への翻訳を試みた人々が直面した基本的な問題は英語への翻訳者の困難と同じであると述べている。つまり、できるだけ原典に近い翻訳をしようとする、一語は常に同じ訳語に置き替えたいという要求が生じるが、原語のニュアンスを同一に伝える用語が存在しない状況に度々遭遇することになる。サイデンステッカー氏は \blacktriangle あはれ \blacktriangledown を現代日本語訳本によって翻訳しているが、 \blacktriangle あはれ \blacktriangledown は古語であるから益々この語独特の持味は消えてしまうのである。例えば、「よろづのあはれ」 all thought (w) 「あはれなるさまにて」 tenderness and solicitude (w): pleadingly (s) 「いと物あはれなり」 strangely stirred (w): melancholy beauty (s) という具合である。(W=ウェリー訳、S=サ

イデンステッカー訳

言葉は生きもので時代と共に変わってゆく。その中で、単語の形は昔と同じ儘で、意味や使用法がすっかり変わってしまったものもある。 \blacktriangle あはれ \blacktriangledown はその代表的なものであろう。今日では「悲しみ・かわいそう」・「憐れみ」の意で用いられている。『源氏物語』の \blacktriangle あはれ \blacktriangledown には、心を激しく突動かす感情や、全身に染み透りやがて身も心も包み込んでしまうような深い思いが伴っており、この主観的な \blacktriangle あゝ \blacktriangledown という感動の方に重点がある。それが次第に多様な意味内容を抱えこみながら洗練されていき、この感動の仕方に型を与えて望ましい情緒を作り出し、内容豊かな言語として使われているのである。物そのものを指示する言語ではなく、心象を象徴的に語る言葉の理解は、年令の幼い者にとつては難かしい。サイデンステッカー氏が \blacktriangle あはれ \blacktriangledown の訳に困惑したということ、言語学習上、幼児の困惑と同一である。 \blacktriangle あはれ \blacktriangledown という語を了解し、我が物と会得する為には、あはれ、あはれ、あはれと常時接して言葉に慣れ、又、如何なる場合に使われているか広くその使い方を体験する必要がある。『賢木』の巻は \blacktriangle あはれ \blacktriangledown を学ぶ者の為に書かれた言語教育の教科書と受取るのが、『源氏物語』本来の目的に適った読み方であると考えられる。

二、「賢木」の巻における「あはれ」の用法について

「あはれ」という語の使用範囲は広く多様であり、しかも言語は適切に用いないと自他共に具合の悪い思いをしなければならないから、 \blacktriangle あ

はれ」の意味概念・使用法を知悉させなければならない。それにはどう
いう教育的方法が考えられるか。《あはれ》の気分の漂う興味深い物語
を語って、その随所に「あはれ」・「あはれに」・「あはれなり」・
「あはれなる」という用語を重ねて気分を意識化してゆくというのは妙
案ではないか。「賢木」の巻の文章は、比較的短い一文から構成され、
緊張感の漲る文体である。事件は後から後から続出する。女房が読み語
るのを聞きながら、姫君はこの物語空間に我を忘れて彷徨ったことであ
ろう。その時、物語の筋を追う言葉とは別に、《あはれなり》と言う音
の響が耳元で繰り返えされるのを、はじめのうちは無意識に、次第に意
識の中に定着させて経験することになると思う。玉上琢彌氏の『源氏物
語音読考』によって、目で文字を追って作られるイメージと、言語を耳
から音で知って作るイメージの違いが明確にされた。語り手の発音の変
化で一語の印象は微妙に変わる。《あはれなり》は、ゆっくり重々しく語
られたり、哀愁切々と語られたりしたであろう。いずれにしても、姫君
の心の奥底に、この言葉は形あるものとして取り入れられ推積された筈
である。もし、文章を目読していたら、どうしても話しの筋に引かれて、
一つ一つの単語の輪郭は消え、《あはれなり》の語は意識に上らなかつ
たかもしれない。目読は文章を味う暇もなく意味を直接心の中でイメー
ジに転化してしまうものである。

《あはれなり》の語を覚えた次には、言語と意味をそれぞれの場面に
限定して使う語法を学ばなければならない。「賢木」の巻の用法は敢え
て広く扱っているから、詳しい内容を知る為に、現代語訳の諸本によっ
て具体的な意味を先ず探っておこうと思う。

「賢木」の巻における《あはれ》と訳語の対比

本文の引用は 岩波文庫「源氏物語」(二巻) 山岸徳平校注による。
現代語訳は a 與謝野晶子 b 谷崎潤一郎 c 玉上琢彌 d 円
地文子 による。

- 1 よろづのあはれをおぼし捨てて (三五七頁四行)
a 苦痛を忍んで b いろいろの愛情を振り捨てて c 一切の気持を
お捨てになり d 一切の情を振りすてて
- 2 御消息ばかりはあはれなるさまにて (三五七頁七行)
a 愛をこめて b あはれを籠めて c 情をこめた書きぶり d 情
をこめて
- 3 はるけき野辺をわけ入り給ふよりいと物あはれなり (三五八頁五行)
a 身にしむものをおぼえた b 何となくものあはれなのです c ひ
どく物あはれな気配が漂っている d はやものあはれな風情が一面
に漂っている。
- 4 物思はしき人の月日へだて給へらん程をおぼしやるにいと
いみじうあはれに心苦し (三五九頁二行)
a 恋人がいたましくてならない b ひどく哀れにいとおいし c と
てもたまらなく思われておいたわしい d 耐えられぬほどあはれ深
くいたわしい

5 はた あはれをもさめつつ (三六〇頁一〇行)

a 恋を成るにまかせて *b* 情愛の方もさめてしまい *c* 愛情もさめてゆき *d* 愛情もさめて

6 「あはれ」と思し乱るること (三六〇頁二行)

a 好きであったのだと *b* しみじみとお胸にもつれて来る *c* さまざまの思いが胸にこみあげて *d* 耐えがたくかき乱れるのであった

7 月も入りぬるにや あはれなる空を眺めつつ (三六〇頁一三行)

a 寂しい色に変わっている空 *b* 物哀れな空 *c* 心にしみるような空 *d* ものあはれに暗い空

8 おほかたの秋のあはれも悲しきに (三六一頁一〇行)

a 秋のわかれ *b* 行く秋との別れは悲しいものなのに *c* 秋の別れ *d* 秋のわかれは悲しいのに

9 え心強からず名残あはれにてながめ給ふ (三六一頁二行)

a 名残り惜しさにひとしほの御様子 *b* 別れのあとの淋しさに打ち沈んでおいでになる *c* 別れたあとの心寂しさに *d* 別れた後の物思いを抱いて弱々しく

10 もどきも あはれにも さまざま聞ゆべし (三六二頁一〇行)

a 同情したり *b* 哀れにも *c* 同情したり *d* 御同情申したりして

11 物のみつきせず あはれに思さる (三六四頁二行)

a 感慨が無量である *b* 限りなく悲しくお感じになります *c* ただ感慨あふれて心寂しく *d* 言い尽くせない淋しさばかりである。

12 別れの御櫛たてまつり給ふ程 いとあはれにてしはたれさせ給ひぬ (三六四頁七行)

a 悲しみに耐えがたくおなりになったふうで *b* そぞろにあはれを催し給うて *c* とても胸がつまって *d* そぞろにあはれをもよおされて

13 大将の君 いとあはれに思されて (三六四頁一〇行)

a 身にしむ思いをしながら *b* お胸が一杯におなりなされ *c* 心残りにお思いになさって *d* あわれに名残り惜しさを忍びかねて

14 あはれなる御遺言ども多かりけれど (三六六頁一行)

a 御希望を述べられた御遺言 *b* 懇ろな御遺言 *c* 心をうつ御遺言 *d* お心深い御遺言

15 見たてまつり給ふ御気色 いとあはれなり (三六七頁六行)

a 同情する人が多かった *b* お可哀さうなと世の人々も *c* お気の毒と世間の人々も *d* あはれ深く人々も

16 いとあはれに世の人も見たてまつる (三六七頁六行)

a 同情する人が多かった *b* お可哀さうなと世の人々も *c* お気の毒と世間の人々も *d* あはれ深く人々も

17 折から物あはれにて大将の御袖いたう濡れぬ

(三六八頁九行)

a 迫った実感は *b* 折柄ものあはれで *c* 時が時ゆえ心にしてみ

18 わたらせ給ふ儀式はかはらねど 思ひなしあはれにて

(三六八頁一三行)

a お心持は寂しくて *b* 思いなしかあはれで *c* 気のせいものの寂
しくて *d* 思いなしかもの淋しくて

19 「あはれにありがたき御心」

(三七〇頁九行)

a 感激していて *b* 君を労っておあげなしますこと *c* 本当にもつ
たいないお心だ *d* ほんとうに有難いお心だと

20 あはれに思したれど

(三七二頁九行)

a 愛しておいでになったが *b* 大切にしていらいっしやいますけれど
c 弟として愛していらいっしやるけれど *d* 弟君として悲しんではい
らっしやるけれども

21 かやうなる中らひは あはれなる事も添ふなるを

(三七六頁一三行)

a 別れが苦しいものであるから *b* なかなか哀れが添ふものですよ
に *c* 心にしみる事もあるというのに *d* あわれの添うものなのに

22 いとらうたげにてあはれにうち聞き給へるを

(三七八頁三行)

a 優しく *b* 心から *c* いぢらしく *d* 心から

23 面変わりせん事あはれに思さるれば

(三七八頁四行)

a おかわいそうなことであるとお思いになって *b* 残り惜しく思し
召されて *c* 心残りにお思いなさって *d* 心残りにお思ひになった
ので

24 世の有様 あはれにはかなく うつり変る事のみ多かり

(三七九頁四行)

a 人生は無常であると *b* 世の中があはれに果敢なく *c* 一切が心
を痛め *d* 世の有様もあはれに頼りなく

25 いふかひなく あはれにて

(三七九頁七行)

a おかわいそうで *b* いぢらしくて *c* いぢらしさに *d* いぢらし
さに

26 二日三日おはするに あはれなる事多かり

(三八〇頁二行)

a 身にしむこと *b* 感慨を催すことども *c* 心うたれる事 *d* お心
に深く触れること

27 あはれ この頃ぞかし

(三八三頁五行)

a — *b* ちようど去年の今頃 *c* ああこの頃だったな *d* ああこ
の頃の季節であった

28 野の宮のあはれなりし事

(三八三頁六行)

a 野の宮のわかれ *b* 秋のあはれをしみじみと味はったのが *c* 心
うずくようだった出来事は *d* 秋のあはれを心にしてみ

29 思へる気色の心ぐるしうあはれに思え給へば

(三八四頁七行)

a 可憐であった *b* 気の毒にもかわいそうで *c* 気の毒にもいじらしくも *d* 可愛いそうにもいとしくも思われて

30 かたみに「あはれ」と見たてまつり給ふ

(三八五頁一三行)

a 院のことを思い出しになった *b* 互にしんみりと遊ばして *c* お互いに愛情をこめてお顔を見あいなさる *d* お互いに血を分けた兄弟としてしみじみ御覧なさるのであった

31 野の宮のあはれなりしあけぼのも

(三八六頁五行)

a 曙の分れの身にしんだこと *b* 野のあはれ深かった趣まで *c* 心にしみるようだった夜明の事も *d* ひとしおあわれと御覧になるのであった

32 え慕ひ聞え給はぬを「いとあはれ」とみたてまつり給ふ

(三八八頁一〇行)

a 御親心には哀れであるに違いなかった *b* たいそういぢらしいと御覧になり *c* かわいそうにと御覧になり *d* ひとしおあわれと御覧になるのであった

33 折もあはれに

(三八九頁一行)

a 物の身にしむおりからであったし *b* 物哀れな折ではあるし *c* 時期も時期だし *d* 季節もあわれ深い秋の末といい

34 あはれなる雪の雫に濡れ濡れ行ひ給ふ (三九〇頁三行)

a 雪の中で *b* 哀れなる雪の雫に濡れ *c* 心にしみる雪の雫にぬれながら *d* 降りしきる雪の雫にあわれに泣き濡れて

35 「今は」と世を背くほどには 怪しうあはれなるわざを

(三九一頁五行)

a 悲しいものである *b* 妙に哀れなものですのに *c* 妙に悲しいもののなに *b* 不思議にもの悲しいもののなに

36 大方の事さまも あはれに尊ければ (三九一頁六行)

a この寂しい結末の場 *b* 感動していた際でもありますから *c* 事のなりゆきそのものが悲しくもあり尊くもあるので *d* 尊くしめやかな有様に心を深めていられた折からのこととて

37 いとどあはれに悲しうおぼされて (三九一頁八行)

a お気の毒に比べて *b* ひとしほ悲しくいたはしくおなりになって *c* 胸がしめつけられ気の毒に思いなさって *d* ひとしおおいたわしくて

38 あはれのみ尽きせねば胸苦しうてまかで給ひぬ

(年九三頁三三行)

a 悲しみに堪えないで *b* 哀れなことばかり尽きませぬので *c* かなしみばかりあふれきて *d* 悲しみはいつになっても尽きないで

39 物のみあはれにて

(三九三頁一三行)

a 人生の悲哀ばかりを感じておいでになって *b* 人の世の無常ばかり

りをお感じになって c ただ感慨があふれ d ただあわれ深くのみ
思されて

40 あはれに思さるるに (三九四頁四行)

a 寂しさに似た感じを宮もお覚えになって b 哀れにお感じになり
ますのに c 心寂しくお思いのときに d うら淋しくお覚えになっ
ている折柄

41 まろうどもいと物あはれなる気色に (三九四頁八行)

a なんとなく身にしむふうに b たいそう感慨を催し給うて c も
の寂しい様ゆえ d 昔に変わるあわれ深い有様に

42 物あはれなる気色さへ添はせ給へる (三九五頁九行)

a 深味がおできになりましたが b しんみりとした様子がお見えに
なりますのは c 心をひきつけるような所まで備わっておいでなさっ
たのは d しみじみものあはれな御様子の添うてきたのは

以上それぞれの文脈の中で原文の《あはれ》がどの様な意味に解され
ていたか大別してみよう。(語句の下の数字は右の用例の番号)

- A 感嘆詞として 27
B 恋いしい人への愛情 1・2・5・6・20・21・30
C 心深い有様 14・19・22・26・36・42
D しみじみとした思い 9・11・34・41
E 悲しい寂しい思い 12・13・17・18・35・37・38・40
F 気の毒な思い 4・10・15・16・23・25・29・32

- G 自然の情趣 3・7・8・28・31・33
H 無常感 24・39

物語の場面の中でこのように幅広く細やかに使い分けられた《あは
れ》という言葉は、言葉の表層的な意味、辞書的な意味として認識され
るのでなく、前言語状況的な心の深層部に、あはれ という音韻に托
された姿・形あるものとして刻みこまれ、心と共に息づきはじめるであ
ろう。紀貫之が『古今集』の仮名序で「やまとうたは、人の心を種とし
てよろづの言の葉とぞなれりける」と述べているように、確かに言葉の
背後に人の心が先ず存在するのだけれど、その心は又、言葉によって意
識の領域を領ぜられているようでもある。

おわりに

言葉の意味は、相対する語、或は、相反する語と並べてみた時に、よ
り鮮明に了解される。「賢木」の巻の前は「葵」の巻であるが、この帖
に《もの憂し》の語が頻出していることは前述で注意を促した通りであ
る。《憂し》は疲れた、嫌だ、何もしたくない、と落ち込んでいる拒否
感情が主となっている。《あはれ》も《憂し》も瞬間的な感覚的感情で
はなくて、心の深層部に持続する感情である。そして、《あはれ》を
《憂し》と対応させてみると、人はいかに《あはれ》な思いを希求して
いるかに気づくのである。恋いしいにせよ、悲しいにせよ、《あはれ》
と共に情感が生き生きと流出する。宣長の言うように《もののあはれ》
はしみじみと人生を味う望ましい人情であり、《あはれなり》は有限な
生命をいとおしむ美しい言葉である。

物語の順序からして、姫君は「葵」の巻で先ず、うっとおしい嫌な気分を幾つかの用語と共に充分に体得してから、その心を慰められるように「賢木」の巻で《あはれ》を学ぶことになる。しかも、紫式部は更に「花散里」の巻へ帖を讀けてゆく。この巻にあるのは、日常性の中で一番心魅かれる《なつかし》という言葉の世界である。《なつかし》も熟知しながら説明しにくい用語である。倦怠的《うし》と昂揚的《あはれ》の情感を知りつくした後に、私達はむずかしいバランスを保ちながら、穏やかでやさしい《なつかし》の日常性の中に憩いの場を見出すことができるようになるのであろう。「葵」・「賢木」とそれぞれ四十八頁ずつ語り続けながら、「花散る里」は本当に驚くばかり短い四頁の短編物語である。——詩人の直感に鋭いものだ、サイデンスツッカー氏は、何故かわからないがこの巻が大好きだと『源氏日記』の中で述べていらる。——《なつかし》の語と共に懐かしい零囲気をほのかに、さらりと描き出して、紫式部は「《うし》にも《あはれ》にも傾かないで、しかも《うし》と《あはれ》を充分識りつくした上で、穏やかな、懐かしい世界を御自分で自由に創り出して下さい」とほゝえみながら姫君に語りかけているようである。

同様の構造で、六帖「末摘花」(三四頁分)《ひなび》・七帖「紅葉賀」(二八頁分)《みやび》・八帖「花の宴」(十頁分)《おかし》・おもしろし《が物語られてるが、これ等の考察は他日に譲りたい。

注1 今井源衛氏の『女子教訓書および艶書文学と源氏物語』の示唆によるところが多い。

注2 『紫式部日記』の中に推論の根拠となる事件がいくつか残されている。

注3 『無名草子』に次の一節がある。「…大斎院より上東門院へ『つれづれ慰みぬべき物語やさむらふ』と仰せられければ『珍らしき物は何かは侍るべき。新しく作りて参らせ給へかし。』と申しければ『作れ』と仰せられるを承りて、源氏を作りたりけるをこそ…」と河海抄もこれに依る「大斎院より上東門院へ『珍らかなる草子や侍る』と尋ね申させ給ひけるに、宇津保・竹取やらの古物語は目なれたれば、新しく作り出して奉るべき由式部に仰せられければ、石山寺に通夜して、此の事を祈り申すに、折りしも八月十五夜の月、湖水にうつりて心の澄み渡るまに物語の風情、空に浮びたるを忘れぬ先きにとて、仏前に在りける大般若の料紙を本尊に申請けて、先ず須磨・明石の両巻を書きとどめけり。…其の後、次第に書き加へて五十四帖になし奉りしを、権大納言行成に清書せさせられて斎院へ参らせけるに、法成寺入道関白奥書を書かれて云ふ、『此の物語、世皆、式部が作とのみ思へり、老比丘筆を加ふる所なり』と云々…。」

—以上—